初めて「　」を殺した日。《抜粋》

１　杉本隆博

　彼が撃墜王と呼ばれ、新米の戦闘機乗り達に畏敬の念を込めてその名を呼ばれるようになって久しい。彼より経験が多い搭乗員はそれほどにはおらず、士官らも彼を信頼し、苦境の時は彼らの命令の拠り所とした。それは、彼らが守る南の空が悲しみと非情を孕み、目に眩しく輝く、奇跡のように美しい珊瑚礁の海が、表情を亡くして彼らの命を噛み砕き飲み干すようになってから、より一層もたれかかる様になっていた。

　当時、彼らの操る戦闘機は何者もその背を追いかけることが許されていなかった。いつだって彼らは追いかける側であり、撃ち落とす側であった。しかしそれは束の間の夢のごとく、儚く終っていった。

２　織田純矢

　それは人の姿をしていた。紛れてしまえば、どこにでもいるような海軍航空隊の搭乗員である。

　しかし、その目は搭乗員のものではなかったし、ましてや人のものでもなかった。陸軍で育った彼の生い立ちは誰も知らない。当人すら、自分の年齢を知らず、そして祖国を知らなかった。

　それは兵器そのものであった。管理が陸軍から海軍へと移っただけで、彼がその域から踏み出すことはない。彼を人として捉える世界に押し出されたことは、彼には敵に負けることよりも屈辱であった。そして、人として扱われることが不思議でならず苦痛でならず、戦友らと同列にされることを否定したものであった。

　彼が育った場所では、日々人が死んでいた。死体が転がる風景は日常で一一五体満足の骸は稀であり、常にそこには黒々と蠅がたかり、羽音が唸っていた。銃声と殷々と響く砲声、そして子供の泣き叫ぶ声が木霊する空、血肉が腐敗した土に寝そべる日もあれば、命が朽ちていく匂いに満ちた野を駆けまわる日々であった。そして彼にもその腐臭が取りつき離れず、その手はいつでも誰かの血で洗われて、その血液だけが僅かに、冷たく刃物のような彼に唯一、生きている人間の温もりを伝えるだけである。

３　倉石雅治

　記事を読みました。帰ってきた兵隊に郵送で機関紙が送られてきまして、それで読みました。テレビや新聞でも少し話題になっていましたよ。だから俺は手紙を書こうと思います。今この瞬間、俺は予備校生を辞めました。まだ講義室にいますが、これを書き終えたらもう終わりです。

　遠藤大尉、安原伍長。あなた方の笑う顔が浮かびます。印刷された文字の向こうで、俺たちに苦笑しているのではないでしょうか。

　隊員の名前は書かれていませんでしたが、集合写真で分かりました。一一何故名を伏せたのでしょうね。上が妙に気を利かせたのでしょうか。写真も目線が入っていて、まるで犯罪人だった。

　それにしても、まだあそこに大尉たちはいらっしゃるのですね。こちらではもう事後のことば

かり、過ぎた決断の批判ばかりであまり戦場は報道されないものですから、懐かしく拝見しました。